

I 学校の概要

アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業

綾川町立綾上小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
1学級 28名	2学級 41名	1学級 29名	2学級 37名	1学級 33名	2学級 40名	2学級 4名	11学級 212名

○教員数 16名

◆学校の特色

本校は、平成17年4月に5校が統合し、今年度で13年目を迎える。児童は、多くの人の愛情を受けて育った素直な児童が多く、決められた課題に取り組もうという気持ちをもっている。一方で、自分のよさに気づき、主体的に周りに働きかけたり、困難なことに挑戦しようとしたりする児童は少ない。また、人間関係が固定しがちで、新たな人間関係づくりに自分から関わろうとする意欲が低い傾向にある。

II 研究主題等

研究主題

きき合い、かかわり合い、学びを楽しむ子どもの育成

◆研究主題設定の理由

本校では、昨年度より「アクティブ・ラーニング研究推進モデル校事業」の指定を受け、児童が学ぶ楽しさを実感し、主体的・能動的に学習に取り組む授業を目指して、子どもの興味・関心に沿った教材開発やカリキュラム・マネジメントに取り組んできた。

昨年度の研究の成果として、児童の生活と学習を結ぶ単元化を行うことで、主体性を生かした活動が展開でき、意欲の向上が見られるようになった。学習の中で、課題に対するまとめを自分の言葉で書く、前時に分かったことをもとに本時の課題を考える、友だちの考えを取り入れ、自分の考えに生かそうとするなどの姿も見られるようになってきている。また、個の見取りを生かしたペアや小グループを編成し、学び合う場を設定することで、友達と関わることを楽しいと感じる児童が増えてきた。

研究の中で新たな課題も生まれてきた。一つは、学び合いの場に、応答や質問と言う形でも参加できない児童への効果的な支援を考える必要があること。もう一つは、研究を深めるために、発達段階に応じて、全校で統一した取り組みを進めることである。

そこで今年度は研究主題を「きき合い、かかわり合い、学びを楽しむ子どもの育成」として、「きく・語る」活動を通して、自己を語り、学び合う楽しさを児童が実感できる授業づくりや単元開発を推進する。

「きき合い」とは、自分の思いや考えに引き付けて他者の考えをしっかりと聞き、そこから生まれた疑問や新たな考えを伝え、互いにより深い考えを見つけ出そうとすることである。

「かかわり合い」とは、「もの」や「こと」に対して、疑問や興味をもち、自らかかわろうとする気持ちの発露として、新しい視点からより深く対象に迫ることである。また、友達のよさや自分との相違点に気づき、多様性を柔軟に受け入れた上で、自分の思いや考えが深まるように、相互に伝え合うことである。

「学びを楽しむ」とは、学びたいという気持ちと、学んでよかったという実感を振り返りによって確かなものとし、新しい課題を見つけ、学び続けたいという主体的な態度をもつことである。

研究の柱は以下の3点である。

- ① 自己内対話を促す「きく・語る」活動の研究
- ② もの・人・ことへの「かかわり」を促す教材開発・単元化の研究
- ③ 学びを捉え直し、自己理解や認識の再構成を促す「振り返り」の研究

◆研究内容及び方法

(1) 研究内容と方法について

① 研究内容

(ア) 自己内対話を促す「きく・語る」活動の研究

対話によるかかわり合いにおいて、内省、自己内対話が生じることをねらった「きく・語る」活動の推進

- ・スキルアップのための日常指導
- ・自己開示して安心して話し合える学級経営
- ・自分の考えを書くための思考ツール（マインドマップ、ベン図など）の活用

(イ) もの・人・ことへの「かかわり」を促す教材開発・単元化の研究

児童が主体的・能動的に、もの・人・ことへ「かかわり」、学習を進めようという意欲を喚起する教材開発や単元化を行う。

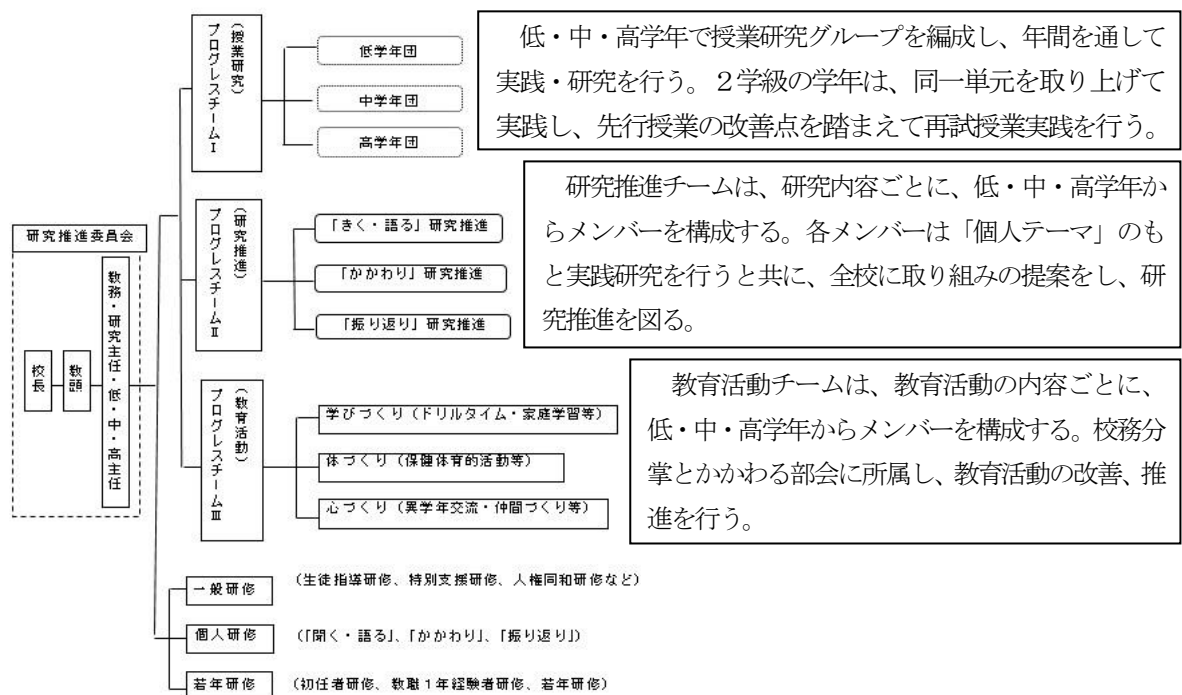
- ・児童の興味・関心に応じ教科間の関連を生かしたカリキュラム・マネジメント
- ・学習形態の工夫（ペア・小グループ・全体交流）
- ・思考ツールを活用したかかわりの場の工夫
- ・かかわりを促す話型カードの活用

(ウ) 学びを捉え直し、自己理解や認識の再構成を促す「振り返り」の研究

もの・人・ことへの「かかわり」から、自分を見つめ、自己理解を深めることが、自ら学ぼうとする学習意欲に結びつくと考え、何をどのように振り返ることが有効かを研究する。

- ・授業の終末での振り返りの時間の確保
- ・事前アンケートと単元末の比較による縦の振り返り
- ・友達の考え方との比較による横の振り返り

② 研究方法 ～低・中・高学年団によるプログレスチームの改善と活動～



III 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

1 (児童質問紙) 学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標 「①できている+②どちらかといえはできている」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) グループ構成の工夫

事前に教師が児童の考えを見取り、異なる考えの児童による意図的なグループ構成をすることで、友達と自分の考えを比較し、相違点に着目して、よりよい考えを求めて自分の考えを深めていこうとする話し合いとなった。

Aさん 資料: 他の齋田 ※要点をまとめていくことが得意、リーダー	Dさん 資料: 農経高校 ※文章は書けるが言語化が苦手
Bさん 資料: 農業試験場 ※事前調査では地域のよさへの関心○	Eさん 資料: 地域のお店 ※関心◎ 周りの意見を聞き進められる
Cさん 資料: 保存会 ※文章を書くことが苦手だが、発言は積極的(土地のよさに関心が強い)	

席表を用いた実態把握

全国の齋田と比べても、お田植祭をしっかりと残しているのが綾上のよさだと思うよ。(自身の考え)

そういう見方もあったのか。それって関係あるかもしれないね。(自己内対話)



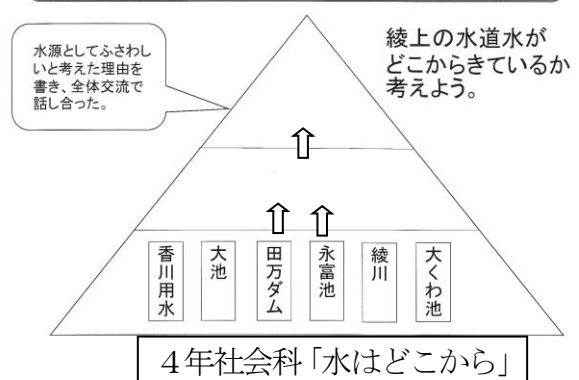
ぼくは綾上に流れている綾川が米づくりの伝統に関係していると思ったけどどうかな。(友達の異なる考え)



(2) 思考ツールの活用

思考ツールを活用することで、友達と話し合う場で、互いに相手の考えがとらえやすくなり、話し合いが活発になった。思いはあっても言語化して伝えるのが苦手な児童には、グループの他の児童が、思考ツールを見て、「どうして、そう思ったの?」と問いかけたり、カード操作の時には、「これでいいかな? どう思う?」と意見を求めたりしてかかわることで、全ての児童が学び合いに参加できるようになった。

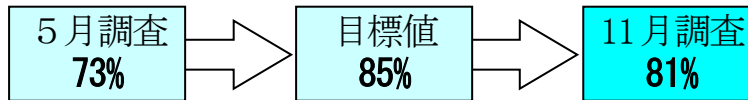
ピラミッドチャート
6つの予想された場所を付箋に書き、水源だと考える場所を上にする。考えを一つに絞るための話し合いに活用した。



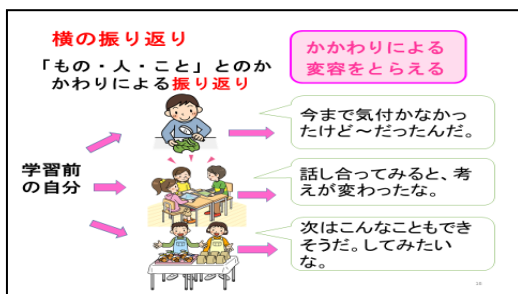
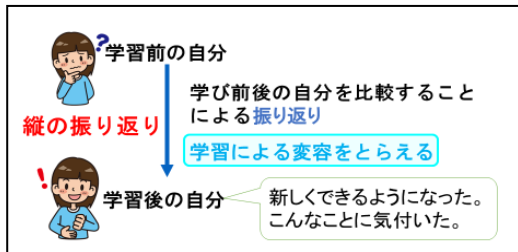
- グループでの話し合いに児童が必要感をもてるように、意図的なグループ構成をすることで、友達との相違点に気づき、自分の考えを揺さぶられ、よりよい考えを模索して、さらに話し合おうとする姿勢を引き出す。
- 個々の思考や話し合いを深めるための適切な思考ツールを活用することで、互いの考えが可視化され、話し合いが焦点化される。

2 (児童質問紙) 授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①取り組んでいる+②どちらかといえば取り組んでいる」の合計



指標の達成に向けた実践



「もの・人・こと」にかかわった自分を見つめ、自己理解を深めることによって、自ら学ぼうとする学習意欲を喚起できると考えた。そこで、何をどのように振り返ることが有効であるかを教師が単元の始めに考え計画的に振り返りを行った。

学習前後の自分を比較し、学びを通して自分がどんなことができるようになったか、新たな気付きは何であったかをとらえ、自己理解を深めていく縦の振り返りの場をもった。

「横の振り返り」として、「もの、人、こと」へのかかわりを通して、新しいものの見方を獲得したり、次の課題を発見したり、他教科や生活へと広がったりすることをめざしてきた。

実践例 2年生活科「野菜の世話をしよう」

苗を植えて収穫するまでの野菜の世話を振り返って本を作り、友達と交流することにより、自分の成長に気付き、学習への満足感を味わうことができた。

水やりが大変だったよ。土にさわってから、たっぷりやったよ。



がんばったから、こんなに大きな野菜ができたんだね。

実践例 4年社会科「水はどこから」

単元の1時間ごとの学習活動と振り返りを「水の循環図」に書き込んでいくことで、単元全体の中での振り返りができるようにした。

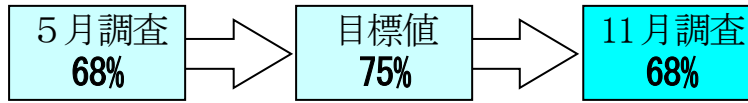
単元を通した振り返りを1枚の紙に位置付けることで、自分の疑問が解決していく満足感をもたせるとともに、自分の考えの変容への気付き、新たな疑問を引き出し、意欲を高めることができた。



- 毎時間の振り返り、単元全体を通した振り返りの場を意図的にもつことで、児童が自分の学習の深まりに気付き、学習への満足感を味わい、意欲的に学習に取り組むようになる。
- 振り返りの交流を行うことで、その際に発見した次の課題を学級全体で共有をすることができ、児童主体の学習展開が可能になる。

3 (児童質問紙) 授業の内容がどの程度分かりますか。

指標 「①よくわかる+②だいたいわかる」の合計



指標の達成に向けた実践

(1) 児童の興味・関心に応じ教科間の関連を生かしたカリキュラム・マネジメント

実践例 5年総合的な学習

地域の伝統行事「主基(すき)斎田お田植祭」と関連付けて総合単元「体験しよう! 綾上の米づくり」を組み、伝統行事から学んだことを生かして米づくり体験を行った。米作りに際して、理科「発芽と成長」の学習とつないで、もみまきを行い、社会科「米作りのさかんな地方」の学習することで、綾上の米作りと比較して考えを深めていった。また、愛知県岡崎市の小学生が斎田の行事に参加していることを知り、ともに伝統を守り続けている地域との交流を目標に学びを進めることで、綾上のよさに興味をもち、伝えていこうとする意欲を引き出すことができた。



(2) 児童の生活に密着した教材開発

実践例 4年社会「水はどこから」

教科書で岡山県の水の確保について学習した際に、「自分たちが住んでいる綾上地区は、どのように水を確保しているのかを調べたい。」という声を引き出し、綾上の水道事業の実態を調べることにつなげた。綾上地区について学習する上で、水の循環や浄水場等の施設についての基本的な知識、学び方を教科書教材でしっかりとおさえ、綾上地区の学習でも生かし、児童が興味・関心をもって調べられるようにした。



【綾上の水道水の水源を立体地図から探して話し合う児童】

- 児童の興味や意識をつないで、教科、総合的な学習、道徳、特活などを単元化することで、児童の学習への意欲が高まる。主体的な学習の中で、児童は、新たな気づきを得て、「分かった!」「できた!」という実感をもつことができる。
- 児童の生活にかかわる教材を提示することは、児童の興味・関心を高めると共に、「なるほど、そうだったんだ。」という深い理解に結び付く。
- ▲ 「授業の内容がよくわかるか」という設問に対して、児童の意識の向上は見られなかった。「授業では、学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいるか」と言う設問に対しては、28.2%から52.7%に伸びている。児童が主体的に学習に取り組み、「学びに向かう力」は培われつつあると言える。しかし、児童にとって「授業がわかる」とは、知識・理解が定着し、テストでよい結果が得られることだと思われる。「課題を発見する力」や「課題解決に向けて協同的に学習する力」が価値あるものだということを児童に伝え、学力観を共有することが必要ではないだろうか。

◆特徴的な取組

全校で推進する「きく・語る」活動

(1) 安心して「きく・語る」ことができる支持的学級風土づくりのための活動（月に1回実施）

「いいところさがし」(学級)

ねらい ・自分のよさ、友達のよさを見つける。
・よさを伝え合い、温かい人間関係を形成する。

どんないいところを見つけてくれたのかなあ。
楽しみだなあ。



友達にいいところを伝えたいな。
書くから、後で見てね。

(2) 「きく・語る」ためのスキルトレーニングのための活動（月に1回実施）

「好きなものクイズをしよう」(ペア学年)

ねらい ・相手を知るために質問ができる。
・きかれたことに答えることができる。

ペアさんが、分かりやすく聞いてくれたから、答えられたよ。
話すのは楽しいなあ。



答えにくそうだなあ。
言い方を変えて質問してみよう。

(3) 「きく・語る」を実際の生活に生かす活動（学期に1回実施）

「きずなグループ出会いの会 他己紹介をしよう」(異学年グループ)

ねらい 他のペアに自分のペアを紹介することで、ペア以外の友達のことを知ったり、自分のことを分かってもらったりし、安心して「きずなグループ」に参加できるとの思いをもてる。

ペアさんのこと、よく知っているね。わたしも、野菜が好きだから、いっしょだね。

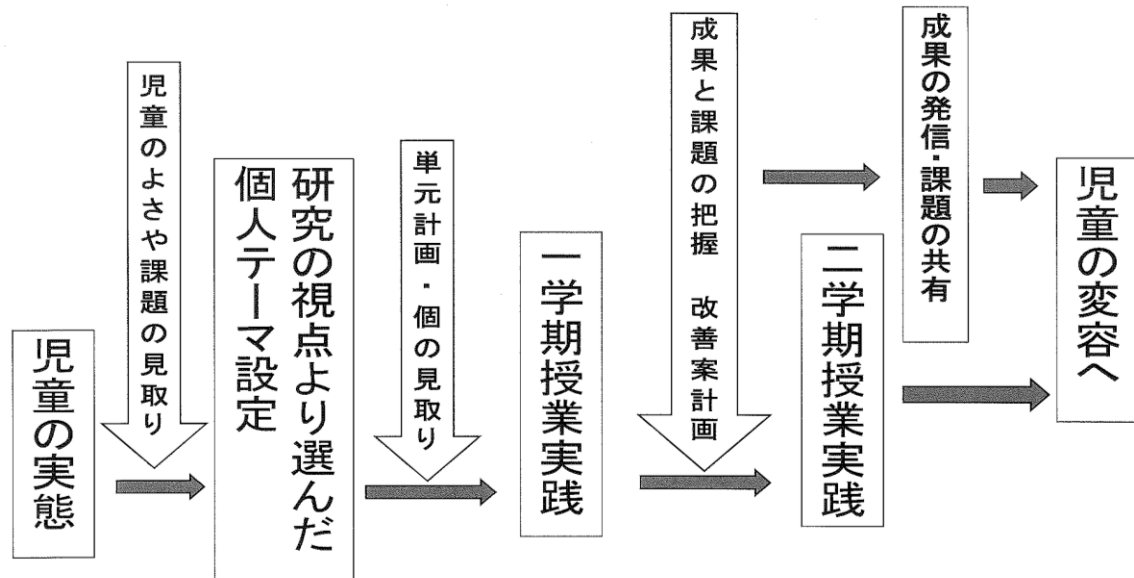


ぼくのペアさんは、野菜が好きなんだよ。特にニンジンが好きだそうです。

ゲーム的な要素を取り入れ、楽しんで「きく・語る」場を設けることで、興味をもって意欲的に取り組めた。児童に活動のねらいを示し、活動後に振り返りの場を設けることで、自分がんばったことやできるようになったことに気づき、次の活動を楽しみにするようになった。何度も場を設けることで、初めての相手とも話せるようになり、自分に引き付けて相手の話を聞けるようになった。

◆特徴的な取組

個人テーマを設定し「学びを楽しむ児童の育成」をめざした研究推進



教員全員が研究テーマに迫るために「きく・語る」「かかわり」「振り返り」の3つの研究内容より個人テーマを設定し、1学期に授業実践を行った。夏休みに実践交流を行い、そこで把握した成果と課題を踏まえて、2学期の授業実践へとつなげていった。研究推進のためのプログレスⅡで情報交換を行い、各チームが成果と課題を全教員に発信し、共有することで、めざす児童像へと迫った。

個人テーマ例

《きく・語る》

「思考ツールを活用し、どの子も主体的に「きく・語る」ことができる学習」

「音によるコミュニケーションを基盤として、主体的に「きく・語る」ことができる音楽学習の工夫」

《かかわり》

「思考ツールを使い、話し合い活動を進め、理解を深められる学習活動」

「児童が主体的に学ぼうとするグループ学習の工夫」

《振り返り》

「自分の考えを表現し、学んだことを振り返ろうとする児童を育てるための工夫」

「自分なりのめあてをもち、学習に意欲的に取り組むための振り返りの仕方をさぐる」

研究内容より個人テーマを設定し、授業実践を重ね、学期末ごとに自分の実践を振り返り、成果と課題を明らかにし、それを教員同士が交流し課題を共有することで、次の実践でどんな試みが必要なのかが明らかになった。また、それをもとに、実践の計画をたてることで、単元全体を見通すことができ、効果的な単元化や必要な教材開発をすることができた。全教員が「学びを楽しむ児童の育成」をめざして授業を行うことが、研究推進の原動力となった。

来年度は、今年度と異なる研究内容より個人テーマを選択することで、教員が研究全体について理解を深められるようにしたい。

IV 研究の成果と課題

1 成果

(1) 単元化(カリキュラムマネジメント)によって主体的な学びとなり、児童の学習への満足が高まる。

児童の生活や興味に沿って、課題を設定し、教科、総合的な学習、道徳、特別活動を効果的に関連させることで、児童の意識が連続し、学習の中から児童自身が見つけた課題を次の学びへとつなげていった。児童の意識を中心に据えた単元の展開により主体的な学習となり、児童に学ぶことの楽しさを実感させることができた。

(2) グループ構成や思考ツールの活用によって、どの児童もかかわり合い、学びに参加できる。

自分の考えがもてない児童や考えはあってもうまく表現できない児童など、話し合いの場に参加できない児童がいるのが課題であった。そこで、一人ひとりが異なる資料を基に考えをもち、その考えを持ち寄ってよりよい考えを見出そうとする意図的なグループ構成にしたり、思考ツール上でカード操作をしながら話し合う場を設定したりするなどの学習形態の工夫をした。そうすることで、児童同士が相手の考えを知ろうとして質問したり、自分の考えを説明しようとして、根拠を探したりする姿を引き出し、どの児童も学習に参加でき、話し合うことを楽しめるようになっていった。考えが浮かばないときは、まず、友達と話し合ってみる、ということが学習スタイルとして定着しつつある。

(3) 意図的な振り返りの場をもつことで、学びの深まりや広がりにつながる。

学びによって、自分の伸びに気付くことは、学習してよかったという満足感となり、次の学習への意欲につながった。また、振り返りの中で、新たな課題を見付けたり、生活に生かせることに気付いたりして学びの広がりにもなった。このような気付きが得られる振り返りとなるように、教師が単元全体で振り返りを計画的に行うことが必要なことが明らかになった。

2 課題

(1) 児童自身に振り返りの価値を実感させる手立て

児童は「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている」と考えているが、「自分の学習を振り返り、新たな発見や次の課題に気付くことがよくできた」という児童は増加していない。

教師は、単元の中に振り返りを計画的に組み込み、振り返りの視点を明示したり、振り返りの交流をしたりして、価値ある振り返りとなるように働きかけてきた。そのことは、教師の要求水準の高まりとなり、児童も「今日の学習で～がわかりました。」という授業のまとめや「～して楽しかったです。」という感想だけでは「振り返り」と言えないのだと感じるようになった。振り返りによる学びの深まりを教師は感じ、主体的な学びへとつながったが、児童自身に、振り返りのよさや価値について実感させるに至らなかった。

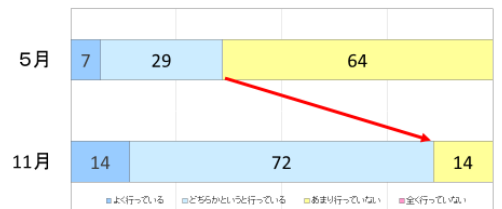
来年度は、振り返りの共有化を図る手立てや、言葉だけでなく視覚的に学びの深まりがとらえられる方法等、より価値ある振り返りとなるように研究していきたい。

(2) 全校的な活動の精選と効果的な実施方法の工夫

研究推進のための部会、教育実践活動のための部会、それぞれが「学びを楽しむ児童を育成」するために、企画提案し、全校的な活動を行った。児童は、活動を楽しみ、一定の成果は上がったが、活動数の多さから、活動するだけに終わってしまうこともあった。来年度は、内容や方法を検討し、精選し、より教育効果のあがる内容や実施方法を工夫したい。

教員アンケートによる評価

学んだことを児童自身が評価し、自己理解が深まるように、振り返りを工夫できている。



児童の変容(振り返りカードによる自己評価)

自分の学習を振り返り、新たな発見や次の課題に気付くことができた

